



第10回北陸地域政策研究フォーラム（地域政策研究センター共催）では「地域政策としてのジオパーク」と題するシンポジウムが開催された。ジオパークネットワークを運営する当事者と北陸3県で取り組んでいる実践者による議論が展開された。本号では、このシンポジウムの抄録を収録する。

地域政策研究センターは、設置から10年を向かえる2020年度末をもって発展的に廃止することになった。2021年4月からは、人間社会研究域内に先端観光科学研究センターが設置され、地域政策研究センターの事業が継承されることになる。本号では、佐無田光センター長による閉所の挨拶を掲載する。

10年間、ありがとうございました。

金沢大学人間社会研究域附属
地域政策研究センター長
佐無田 光

センター閉所のご挨拶

地域政策研究センターは、金沢大学旧経済学部の「地域・経済資料室」（1985年開設）を土台に機能拡充された「地域経済情報センター」（2002年設立）を発展させる形で、金沢大学第二期中期計画のもと、人間社会研究域附属の拠点研究機関として2011年2月に発足しました。現代のグローバル経済の下で地域の経済社会が困難に直面している諸課題に対し、地域再生の道筋に向けた政策科学の理論を構築し、これらの研究を通じて、金沢大学の立地する地元北陸における地域問題の改善や地域の発展に寄与することを目的に、活動を行ってきました。

域内センター設置から最終評価までの9年間のセンターの実績は、著書63編、学術論文196本、その他の論文等43本（合計302件）、学会発表141回、

センター教員が研究代表者の科研費31件、その他外部資金51件、地域と連携した共同研究・受託研究・受託事業39件、国際シンポジウム7回、その他のシンポジウム・セミナー・研究会64回開催、政策提言等の報告書31件を数えます。

当センターは、当初より10年間を一区切りとして設置されており、2019年度に最終評価が実施されました。この最終評価では、金沢大学における地域政策研究の拠点としての調査研究の実施、研究成果の発信、地域への還元活動が活発に行われており、その目的はある程度果たしていると評価されましたが、本学の更なる研究力強化のため、設置から10年を迎える2020年度末をもって発展的に廃止すると結論されました。その上で、研究域を超えた研究力を集結し、地域政策を地域創成という観点から「観光学・資源活用」という構想を具体化することを求められ、2021年4月からは、人間社会研究域内に新たに先端観光科学研究センターを設置して地域政策研究センターの事業を引き継ぐことになりました。

■センター閉所のご挨拶

金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター
センター長 佐無田 光 …… ①

■第10回北陸地域政策研究フォーラム 共通論題「地域政策としてのジオパーク」

金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター
准教授 菊地 直樹 …… ③

組織としては一部機能を引き継ぎますが、研究テーマ、アプローチ、スタッフいずれも従来とは大きく異なる体制に移行します。前身の1985年から35年間に渡る地域政策研究センターの歴史は、これをもってひとまず幕を閉じることになります。

これまでの活動や成果を総括して残す目的で、「足下を掘れ、そこに泉わく ―地域政策研究センターのあゆみ」と題する冊子を3月に発行する予定です。また、センターの活動の詳しい内容については、毎年度発行してきた『地域政策研究年報』、および前センターから継承して刊行してきたニュースレターCURESをHPからご覧になれます。

地域政策研究センターの歩みは、地域と大学との関係の歴史と重なります。ここ金沢というまちは、歴史的に学術を強みとして、それを地域の持続的な発展のために活かそうとする精神を育んできた文化的な地方都市です。その精神は、時代を超えて繰り返し発露し、形を変えながら引き継がれてきました。当センターもその一形態であったと言えます。地域政策研究センターは新しい組織に移行するわけですが、振り返ると、この背景には、2004年に国立大学が独立行政法人化された改革が影響しています。大学間の競争が激しくなり、大学内のいかなる組織も時代の課題に応じて改革・再編して対応していかなければならなくなりました。

現代の知識経済の下で、大学は「知識」をより「生産的」に生み出し、それを価値に転化するイノベーションの担い手たることを強く求められています。すでに大学は、世俗から距離を置いて学問を究めるような聖域ではなくなっています。これは、世俗の中にこそ課題を発見し、問題を解決するために学術を構築しようとする、当センターが目指していた方向性ともある意味では合致しています。しかし、昨今は、「生産的」な大学であるべきという振り子の振りが、やや行き過ぎているようにも見えます。研究の競争はますます激しくなり、研究者の業績は外部資金の獲得額で評

価される度合いが強まっています。研究者が忙しくなりすぎて、数字で評価される成果を求められるために、落ち着いて思索を深めることができなくなっています。けれども、それに反発するだけでは大学経営的には持続できない状況です。このジレンマに個々の研究者は葛藤しています。地域と大学の関係を時代に応じて再構築し、持続可能な学術の発展のためのバランスの取れた研究活動体制を構築することは、次期の新センターでの課題の1つです。

最後になりましたが、これまで地域政策研究センターの事業にご協力いただいた個人・団体の皆様に心より御礼申し上げます。さまざまな立場からの的確な助言・提言をしていただいたアドバイザーの先生方、地域経済情報センター時代に当センターの基礎を形成する際に尽力していただいた旧経済学部の先生方、センターの活動を理解し支持していただいた金沢大学の学長・理事・域長・学類長や同僚の先生方、センターの研究会に参加して共同で研究活動を進めてきた学内外の数多くの先生方、シンポジウムや講演会等の企画を通じて連携・協力をいただいた関係者の皆様、北陸を拠点にして地域研究のネットワークを構築してきた北陸地域政策研究フォーラムのメンバーの皆様、共同研究等を通じてともに課題解決に取り組んだり議論を重ねたりしてきた自治体・企業・地域の方々、そして、センターの事業を裏で支えていただいた事務スタッフの皆様、ここに記して感謝を申し上げます。

センターの活動を通じて得られた数多くの知見やネットワークは価値ある資産です。地域再生の道筋を示す研究は道半ばとはいえ、これまでに積み上げられてきた地域政策研究センターの活動成果は、センター教員として関わったメンバー一人一人が足下の課題に真摯に取り組んだ努力の積み重ねであることを強調しておきたいと思います。地域政策研究センターの経験や記録が、同じような取り組みをする後進の何らかの参考になれば幸いです。

金沢大学人間社会研究域附属
地域政策研究センター 准教授
菊地直樹

第10回北陸地域政策 研究フォーラム 共通論題 「地域政策としてのジオパーク」

2019年12月14日(土)、石川県文教会館において「地域政策としてのジオパーク」と題するシンポジウムを開催しました。第10回北陸地域政策研究フォーラムの共通論題として企画したものです。約50名の方が参加されました。

なぜジオパークを北陸地域政策研究フォーラムの共通論題として取り上げたのでしょうか。第一に、ジオパークが急速に拡大しているからです。現在、日本には44のジオパークがあり、これを目指す地域は15に及んでいます(シンポジウム開催時)。この数字は地域政策を考える際、決して小さくないと思います。北陸には、各県の1つのジオパークが活動しています。富山県は立山黒部ジオパーク、福井県は恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク、石川県は白山手取川ジオパークです。第二に、ジオパークは新たな地域資源を創出する可能性を持っているからです。ジオパークは、ジオストーリーによって地形・地質と生態系と人々の暮らしとのつながりを可視化し、活用できるようにする取り組みです。ジオストーリーとは、地学的基盤・生態系・人間の暮らしの関係に関する主に科学的かつ在来知的な説明体系です。それぞれのジオパークで地域の特徴に基づいたジオストーリーがつくられ、そのストーリーによって地域を再認識したり楽しむことが可能となっています。第三に、ジオパークは究者、行政機関、教育関係者、ガイド、観光関係者、観光客といった地域内外の多様な関係者の協働を促進する仕組みであるからです。このように、ジオパークとは、新たな方法によって

新たな人たちと新たな資源の活用を目指す「地域政策」ととらえる必要があるのではないのでしょうか？

以上の問題関心に基づき、今回のシンポジウムは、ジオパークに関する全国的な動向と北陸三県の活動を相互に学ぶことを目的に企画しました。日本ジオパークネットワーク事務局長の斉藤清一さんによる基調報告「ジオパークの上手な使い方—30年先も住み続けられる地域であるために」からジオパークの使い方を学びました。北陸三県からは、富山大学の安江健一さんによる「まちなかジオツアーで健康づくり」、勝山市役所の町澄秋さんによる「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークにおける地住民を巻き込んだ活動」、白山手取川ジオパーク推進協議会の日比野剛さんによる「白山市における白山手取川ジオパークの位置づけとその意義」と題する報告からは、現場で実際に活動している方ならではの可能性と課題をご教示いただきました。また収録できていませんが、立命館大学の井上学さんには、コメンテーターを務めていただきました。

今回のシンポジウムがきっかけとなり、地域政策の視点からジオパークの活用がさらにすすむことを期待しています。

斉藤 清一 日本ジオパークネットワーク 事務局長
ジオパークの上手な使い方

— 30年先も住み続けられる地域であるために

はじめに

ジオパークとは、地形や地質などから地球の成り立ちを知り、地球とそこで育まれた生態系、さらには私たちの生活や文化、歴史など様々なつながりを「丸ごと楽しみながら学べる場所」です。そのことが分かる貴重な場所を保全・保護することが一番の目的です。また地域の人たちに理解してもらうための教育活動も重要です。しかし、保全や教育だけで

は長続きしません。ツーリズムも取り入れて、持続可能な発展、言い換えれば地域経済的にも回ることを考えるプログラムとなっています。

この活動が始まったのは、2000年ごろヨーロッパです。地球科学者たちが地質学的遺産を保全するために、社会環境を含めた全てのものを使おうという発想で、このプログラムができました。2015年の11月にはユネスコの正式事業となりました。同じユネスコの事業である世界遺産やユネスコエコパークと比べ、ジオパークは最新の保護系のプログラムです。

ヨーロッパから始まって、現在41カ国147地域に広がっています。中国が圧倒的に多く、スペイン、イタリアと続き、日本にも9地域のユネスコ世界ジオパークがあります。

ユネスコの定めるガイドラインには、「保全、教育、持続可能な開発が一体となった総合的な観点で管理された国際的に重要な地質学的サイトや景観による、単一かつ一体的な地理的領域」、「法的位置づけのある管理運営体制を有する」、「地域社会を積極的に巻き込む」などが示されています。他にも法令順守や地質学的なものの販売禁止などは書いてあるのですが、具体的な活動として何をどうするというようなことは書かれていません。

したがって、ジオパーク活動を実践する人たちが試行錯誤しながら進めていくということになります。この意味で、ジオパークは自己決定できるツールであると考えています。

JGNとJGC

ジオパークに認定された地域及びジオパークを目指す地域は、2008年以降急激に増加しています。2008年当初に日本のジオパークに認定された地域は7地域でしたが、現在では44の日本ジオパークと、これを目指す地域が15となっています。この59地域で構成されているのが特定非営利活動法人日本ジオ

パークネットワーク（JGN：Japanese Geoparks Network）です。

一方で、ジオパークの認定審査は、地球科学の関係学会等からなる日本ジオパーク委員会（JGC：Japan Geopark Committee）が、地質学的な価値や活動内容を検証して行います。

前述のとおり、ジオパークのガイドラインには具体的にどのようにジオパーク活動を進めるか、また審査するかということは明確には書かれていません。したがって、ジオパーク活動をしている地域の側と、日本ジオパーク委員会の研究者側とが一緒になって、具体的な内容を考えてきました。その中でジオパークの推進体制、審査の体制や基準についても、一緒に試行錯誤を重ねる中で進めてきました。集まっては話し合い、時には懇親も深めながら、多くの関係者を巻き込み、ジオパークを創ってきたと自負しており、JGNの会員地域、特に最初からこの活動に関わってきた人たちは、「私たちのプログラム」という意識が強いと思います。

そして、その到達点として挙げられるのが審査の視点、ジオパークの基本的なスタンス、考え方ということになると思います。「ジオパークを目指す地域は持続可能な地域社会の実現のために、ジオパークとしてその地域に合ったやり方で関係者が共に考え続けているか、また、そのためにこれまでのやり方を変える覚悟があるか」と。これは今でも、多分これからも、ジオパークの基本的考え方に位置付けられるものだと思います。

活動の成果

JGNでは全国大会や研修会の開催、ジオパークマガジンの発行や調査活動などをし、各地域においては保全、教育、ツーリズムなどをそれぞれの地域にあったやり方で取り組みを進め、これらの成果はネットワーク活動を通じて共有されてきました。JGN設立10周年記念誌を見ると、科学

者、行政、ガイド、観光事業者、防災、教育等々、本当に多くの方を巻き込んで進められてきたことがわかります。

ジオパーク活動が全国で展開されてきたからこそ、広辞苑に掲載されたり、テレビCMに取り上げられたりと社会一般への周知も少しずつ広がってきたのだと実感しています。

JGNのウェブ調査によれば、2015年の段階ではジオパークを知っている人の割合は37.1%、2019年1月には約6割まで来ています。ジオパークと検索してもなかなかヒットしなかった2010年頃と比べれば、だいぶ認知度が高くなったと思います。

活動の目的

JGNの2019年度活動状況調査によれば、「ジオパークの活動の効果として一番期待していることは何ですか」という問いに対して一番多かったのは「地域づくり・郷土愛の醸成」であり、全体の約6割となります。2013年度はこの数字が6.7%だったので、地域づくり・郷土愛の醸成には期待が大きくなったことがよくわかります。

一方で、観光振興とか人口対策というふうに答えた方は、2013年は67.5%いたのですが、現在は20%ぐらいまで減っています。ジオパークは観光振興になるかなと思って関わってみたけど、あまり効果がないと思われているのかもしれない。

さらに言えば、ジオパークというプログラムは保全が目的です。2013年は9.2%、現在、何と0%です。いろんな人がいますので、目的もいろいろと多様だと思います。この調査に答えているのはジオパークの事務局担当者すなわち行政の人が多いのですが、あまりにもはっきりとした結果だと感じます。

審査結果から

「地域づくり」がキーワードとして出てくる以上、地元の中でいろいろなステークホルダーがいて、こ

の人たちが一緒にちゃんと話し合いをして、目的を明確にして活動していくことが当然必要になると思います。

前述のとおり、ジオパークの審査という視点で重視していることは、住民、行政、研究者などの関係者が共に考え続けているかというところでした。なかなか検証しようがないところではありますが、ジオパークの審査ではこのような点を見えています。

特に、ジオパークには4年ごとに再認定審査が義務付けられており、活動が不十分である場合等にイエローカードが出されます。4年間そのままにしておく、この活動は止まってしまうという懸念がある場合、その問題点を指摘して、2年後にもう一度審査するということをしています。残念ながら2017年にはイエローカードが2枚重なって認定を取り消された（レッドカード）という事例も表れています。

再認定審査結果のうち最も大きな課題とされている点を私見としてまとめてみると、再認定審査地域14地域中11地域は運営体制や事務局体制、つまりは推進体制の問題を最も強く指摘されています。いかに推進体制を重要と考えているかが分かるかと思っています。

なお、2017年に認定取り消しとなった地域も再度認定を受けようと活動推進中です。ジオパークに認定されても、急に観光客が増えるとか、変化が起こる訳はありません。それでも認定取り消しにもかかわらず再度挑戦していこうという地域があるのは、ジオパークの魅力かとも思います。

活動の主体とネットワーク

ジオパーク活動を始めるときに最初に取り組むのが、その活動を行う管理運営団体をつくることです。例えば、市町村でジオパーク活動を推進する場合、市町村長個人の意向は活動を大きく左右します。このようなことから、ジオパークの推進はあくまでも

組織として、地域の中のいろんなステークホルダーがみんな集まって管理運営団体となることを条件にしています。ジオパークの認定はこの団体を認定しています。その団体が解散するというようなことになれば、当然ジオパークは消滅します。

重要なのは一緒にやる、共に考えるということだと思います。そのためには、それぞれの目的、活動していることに対して、一つの団体として考えていくことが必要になります。もっと言えば、相手のやっていることに口を出すということです。私たち日本人は、他人のやっていることにあまり口を出しません。しかし、一つの推進組織として意思を持って活動するのであれば、しっかりと意見を言い合うということは当然必要になります。単純なことですがなかなかできず、JGCの審査では「対話や協働がされていない」と評価されます。

組織運営において、合理的に物事を進めようと思ったときの組織づくりは、トップを頂点として縦に枝葉が分かれてつながっている形、「官僚制」というそうです。物事的意思決定は、下から上へ上げて、一番上の人でOKと言ったら決定という、責任のなすり付けのようにも見えますが、実は規則とルールによってちゃんと運営されますので、すごく合理的に物事が進んでいきます。意思決定とかもしっかりと早くできるし、よくあるお役所のシステムです。一方、ネットワークというのは緩やかな紐帯（ちゅうたい）といわれます。大きな目的は共有していますが、基本的にこの中のつながりは弱いですが、だからこそ何か問題に対して柔軟に対応できる。一部から「こんなことをしたいんだけど」と言えば、賛同する人がさっと集まって実行するという形。やった人が責められることもなく、やらなかった、参加しなかったという人も責められることがない、そんな緩やかなつながりがネットワークです。官僚制とネットワーク、どちらもいいところがあるので、その両方をきっちり使い分けてJGNの

運営に当たってきました。

各地域においても、ジオパークを使って地域を動かしていこうとしたときには、きっと必要なことだと思っています。地域の中で参加される人たち、みんながみんなその地域の目的を一つにしていくなんていうことは通常あり得ません。当然、生業としてお金を稼ぎたい人もいれば、子どもたちのために、社会のために何かしたいんだというような人もいて、そのそれぞれの目的みたいなものを明確にしながら、それで大きな目的に向かってみんなで力を合わせるということが重要です。

そのときに必要になってくるものは、やはり「対話」だと思います。とにかくいろいろな話し合いを行っていく、そういう場があるということが大事だと思います。ジオパークはこういうものを行う要素があるのだと思います。

まとめると、経営資源として人・物・金、これは地方の自治体のレベルで言えば限りある資源です。これを増やそうと思っても簡単には増えない。ただ、人の関係性だけは、いろんな人たちが入って対話すること、力を合わせることで無限に広がる可能性があります。実際にこれまでのジオパーク活動の中で、最も強く感じる部分です。集まって、本音で話し合って、「よしやろう！」というところまでつながったときは、本当に力がみんな湧いてくるんです。ひょっとしたら他のプログラムで地域を変えようとしたときも、同じようなものが必要なのかなと思います。（数値等は2019年12月14日時点）

安江 健一 富山大学都市デザイン学部 准教授
まちなかジオツアーで健康づくり

私の経歴の中で道の駅の経営が変わっていると思います。少しご紹介したいと思います。活断層があるところは地形的に真っすぐになりやすいので、そこに

道ができます。道があるところに道の駅がつくられます。活断層といえばマイナスのイメージがありますが、道の駅でそれをプラスに変えられるのではないかと取り組んできました。道の駅には、休憩機能と情報発信機能と地域との連携機能があり、災害対応の拠点にもなります。岐阜県のある道の駅の経営に携わりながら、地震を引き起こす活断層について、地域の皆さんと一緒に学びました。学ぶと、実際に断層を見に行きたくなる人が多く、実際の自然や断層を観察して理解を深めました。野外に出ると地域の方がいろいろ説明してくれます。参加者同士で会話が始まって、私抜きでも地域の人たちで「あそこに〇〇がある」などと話が進みました。これは面白いな、もっと外に出なきゃいけないと感じました。ただ企画や運営は大変であり、一つのツアーを企画するだけでも多くの時間とか労力がかかりました。

私が富山に赴任して関わった立山黒部ジオパークが、ジオパークとの最初の関わりでした。私が今まで苦勞していたツアー企画が、ジオパークと連携して行うとスムーズにでき、今では一緒に取り組ませてもらっています。立山黒部ジオパークは、「高低差4000mロマン」、「38億年×4000m！体感しようダイナミックな時空の物語」というテーマを掲げています。4,000メートルというのは北アルプスが3,000メートルあり、富山湾の水深1,000メートルと合わせての高低差です。50キロの間に4,000メートルの高度差があるというダイナミックな地形を見ることができます。

このエリアの中に、富山市の市街地も含まれています。この市街地でのジオツアーを、立山黒部ジオパーク協会、NPO法人まちづくりスポットと一緒に企画したのが「ブラとやま」です。まちなかの地形や地質を学びながら散策して、世代間を超えてお互いの持つ情報や知識を共有し合うまちなかのジオツアーです。参加者が自分の持つ情報や知識を他の

参加者と共有する場になり、私たちがいなくても参加者同士が会話をし、参加者が地域の自然について考えられるツアーです。富山市の市街地で月に1回、7月から11月に行いました。働き盛りの人たちに子供と一緒に参加してもらいたいと考えて土曜日に行いました。まちなかの僅かな地形の変化を見たり、各所で使われている石を観察したり、地域の人に話を聞いたり、過去の洪水の水位記録を一緒に見たりしました。

実際に歩いてみると、まちなかでは地形の変化はないように見えて、実は特徴的な地形を見ることができます。路面電車のライトレールが車の上を走っているように見える場所があります。いつも平坦な道を歩いていると思っていたところが、よく見ると坂であり、2メートルほどの高さの違いがあることに気づきます。ここでは、富山市の市街地が、常願寺川の扇状地の先端付近であり、その地形が僅かな高さの違いをつくっていることを知ることができます。

扇状地が終わって平らになったところでは、川が蛇行しています。このようなところで氾濫が起きやすいです。神通川では、水害を減らすために、蛇行部分に洪水時に流れる直線的な水路を造りました。しかし、大正3年の洪水以降は直線的にした部分が通常の流路となり、これまでの河道は取り残され、旧河道となります。1909年ごろの地形図を見ると、そのころは蛇行しておらずに真っすぐ流れていますが、旧河道も見えています。今はどうなっているかということ、県庁とか市役所とか駅なんかも含めて、大きな建物、新しい建物が並んでいます。文字が記されていない地図を見ると、そのことがよくわかります。そのような地図を見て、自分たちが今どこにいるかを確認しながら歩いています。昔は、神通川に船を並べて橋にして渡っていました。この場所には、常夜灯が今でも残っており、2つの常夜灯の距離からかつての川幅を知ることができます。また、

この付近には、鱒寿司のお店がたくさんありますが、その理由を地形から考えることもジオツアーとして面白いです。

他にも、市街地を流れる松川の水を調整する水門を見て、町の中が水に漬からないようにする仕組みを学びながら歩きました。また、水害で亡くなった方を弔う地蔵を見たり、扇状地の先端では水が豊富に出ていることを知ったりして、地形的・地質的な背景も知りながら歩いています。時には、大学生が地域の方々を案内しながら町の商店街を歩いたりもしました。

毎回、歩いた後に参加者から感想を聞いています。普段通る道も立ち止まってみると新たな発見があった、学校の体育館が2階にある理由がわかった、普段関わりのない学生との交流ができて元気をもらえた、気持ちよいウォーキングでストレスが発散できた、途中で教えてもらった飲食店に今度行ってみたいなど、さまざまな感想がありました。自分はこういう企画をしたいという意見も出てきました。最後の回には、参加者同士の会話が最初の回に比べると多くなったという感想がありました。参加者同士と一緒に楽しむ時間が増えてきたのだと思います。また、自分はこういう企画をしたいという感想もあり、次につながると感じました。

立山黒部ジオパーク協会、NPO法人まちづくりスポットと一緒に考えて取り組んできたことは、参加者が探究心を持って主体的にまち歩きができるように支援することです。そのため、参加者が身近なものを不思議に思える視点を持てるように心がけました。また、参加者にマイクを渡して積極的に話していただくことにも心がけました。さらに、参加者が毎回のつながりを感じられるようにするため、どの回にも「水害」について考えられるようにしました。これは参加者に伝えずに進めました。最終回では、用水近くの地形的にわずかに低いところを見た参加者が、「ここは危ないね」と話していました。

このまちなかジオツアーを経験して、参加者が自ら調べに行く意識ができ、普段から歩く機会が増えていくことにもつながることを期待します。

以上、立山黒部ジオパーク協会と進めてきた取り組みの一つを紹介させていただきました。

町澄 秋 勝山市産業・観光部ジオパークまちづくり課
ジオパーク専門員
恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークにおける
地域住民を巻き込んだ活動

恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークは、福井県の北東部に位置する勝山市全域をエリアとするジオパークです。2009年10月に日本ジオパークに認定されて、現在まで地域住民とともにさまざまな活動を行ってきています。勝山市では、ジオパークの活動をはじめ以前、2020年からエコミュージアムによる活動が活発に行われてきました。エコミュージアム活動では、地域住民が地域の遺産や魅力を発見、再発見し、それらを保存・活用することによって地域が自信と誇りを取り戻し、地域のアイデンティティとしての「勝山らしさ」構築・再構築が行われてきました。当地域では、そのエコミュージアム活動を切り捨てるのではなく、ジオパーク活動の原動力として、地域住民と一体となったジオパークによるまちづくりを進めています。また、勝山市観光振興ビジョン（2011年策定）においても、「まちづくりの成果である地域の人材や恵まれた地域資源を観光振興の分野で活かしていく」ことが掲げられており、エコミュージアム、そしてジオパークの活動を観光分野にも活かすことを目指しています。

勝山市は、面積は253.88平方キロメートル、人口24,125人（2015年国勢調査）の中山間地域に位置し、市の中心部は県下最大の河川である九頭竜川の中流に当たり、周囲は1,000メートル級の山々に

囲まれています。明治時代の地場産業である繊維産業を中心とした商工業、古くから盛んな農林業が基幹産業となっています。観光振興の分野では、福井県立恐竜博物館と周辺施設、スキージャンプ勝山、平泉寺白山神社が、観光入り込み客数のほとんどを占めています。2017年のデータでは、それぞれ102万人、27万人、36万人が訪れています。

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークのテーマは「恐竜はどこにいたのか？大地が動き、大陸から勝山へ」です。勝山市で見つかる恐竜が生きていた時代から恐竜化石が発掘される現在までの大地の活動が、勝山の大地に記録されています。この大地の活動が現代の勝山の人々の暮らしや産業、文化にも影響を与えています。恐竜が見つかることも当然重要ではありますが、世界一の変動帯と言える日本において、この大地の活動を多くの人に伝えることがジオパークの重要な役割だと考えています。

ジオパークの活動には保護・保全、教育・研究、持続可能な地域振興という大きな3つの柱があります。多くの人に大地の活動を伝えるために重要な地域資源を保護・保全すること、研究によってその学術的に価値付けを行い、教育活動に活かすこと、その資源を活かして持続可能な地域振興、さらには持続可能な世界へとつなげることを目指しています。当ジオパークにおいて、さまざまな切り口で地域住民がこの活動に関わっています。

ここでは2つの例を紹介します。勝山市内にある登山道や散策道の一部は、地域住民が主体的に維持管理し、イベント等で活用しています。その一つが、勝山市遅羽町（おそわちょう）にあるバンビラインです。毎年、4月初旬から中旬にかけてカタクリの花が群生する場所に、地域住民が登山道の整備をしています。この取り組みの元になったのは、地域の遺産を地域住民自らが保護・保全しようというエコミュージアム活動でした。さらにこの登山道を活用して、花期に合わせて「カタクリまつり」というイ

ベントを開催しています。自然観察指導員とともに登山道を歩き、その場でみられるさまざまな植物や生き物、景色を観察し、その景色をつくった大地の活動（火山活動など）を伝えています。

次に市内の人をターゲットにしたジオツアーを紹介します。エコミュージアムの取り組みがきっかけになって、地域に眠っていたさまざまな資源が再発見・復活しました。これらの地域独特の資源が生み出された背景にも大地の活動が隠れています。そのことを地域の人に知ってもらうためのジオツアーを行っています。勝山に住みつづけている人でも初めて訪れる場所があったり、普段見慣れた景色の中にも今まで知らなかった新たな発見をできたりするツアーになっています。地域の人が地域のことを改めて見直し、深い理解をすることで郷土愛やシビックプライドの醸成につながればと考えています。学校における教育活動でも、これらの資源を活用することで、子どもたちから地元のことを深く理解できる機会を提供しています。このような活動を通じて、現在の地域ごとの取り組みが将来的にも継続していくための基盤になるのではないのでしょうか。

今後は、現在市内向けで行っているジオツアーを市外からの参加者を集められるようなツアーにして、多くの人に訪れてもらいたいと思っています。そのツアーでは、地域の人や飲食店、ホテルなどを巻き込み、地域にお金が落ちるような仕組みを作りたいと考えています。例えば、地元のホテルに宿泊したお客さんだけを対象にしたツアーで地元のガイドが案内をしてジオサイト（ジオパーク内の地球科学的な見どころ）を訪れ、地域ならではの食（エコミュージアムの活動で復活したものもある）を楽しんでもらえるものになりたいと思います。地域で伝統的に食べられてきた「食」もその地域の気候や生態系などを反映しており、さらには大地の活動がその気候や生態系に影響を与えていることも多くあります。ジオサイトだけではなく、食からもジオパーク

を楽しんでもらいたいと思います。

地球は長い歴史の中で、時には劇的に、時にはゆっくりと徐々に変化してきました。例えば、劇的な変化は、時として災害をもたらし、ゆっくりな変化は気候変動という形で現在の私たちの暮らしにも影響を与えます。これらのことに対応できるような持続可能な世界を目指す上でも、さまざまなプログラムやツアーなどを構築して、より多くの人に大地の活動を伝えていきたいと考えています。

日比野 剛

白山手取川ジオパーク推進協議会 専門員

白山市における白山手取川ジオパークの 位置づけとその意義

白山手取川ジオパークという名前の中にあるようにエリア内には白山という山と手取川という川が入っています。白山は石川県で一番高い山で、2,702メートルあります。そこから手取川が流れて日本海まで至っています。高低差があり、高山帯を含む山間地から平野部、日本海まであります。この白山市の全域がジオパークになっています。まず、ジオパークに取り組むに当たって、考えたことをお話しします。

白山ですが、名前の由来は雪です。今の季節は降り始めですが、これから徐々に真っ白になっていきます。中流域は、山の谷あいから白山を奥に見ることができます。山の谷間を手取川が流れていますが、中流域では深く切り込んだ峡谷をつくっています。兩岸に田んぼが広がるすぐ隣で手取川が峡谷下の深いところを流れています。河口近く平野部には扇状地が広がり、そこは水田地帯となっています。平野部からは、象徴的に白山が山地の奥に見えています。海岸には砂浜がずっと広がり、所々石ころの場所もあります。白山周辺は国立公園になっていて、特に

山間地を中心として豊かな自然がある地域になります。大型の哺乳類をはじめとして動植物も多様です。そのような中で人の生活が営まれてきていて、生活や産業に関わるものなど、いろんな風景が山地から中流域そして平野部まで見える、この地域はそんなところですよ。

ジオパークでは、見るべきものの保護の対象になるものは、地質とか地形が基本ですが、その上にある動植物、生態系と人の暮らし、これらを一体的にその地域の資源としてつながりを考えます。これらを整理して、白山手取川ジオパークでは、北半球でも最南端に位置する豪雪地帯であり、その中で土砂運搬のプロセスが見られるような場所、さらに、それらを「水の旅・石の旅」という表現をして、そのようなプロセスがある中で、この地域の生活の場に恵みがある、としました。この水の旅・石の旅、土砂運搬のプロセスの話は、最近よく聞く様々な災害にもつながります。この地域は、雪害、水害、土砂災害、そして活火山や活断層もある、多様な災害が発生する地域です。しかし、先ほどの風景はそんな地域だからこそある豊かな恵み、というような言い方をすることができ、そこにつながりがあります。

この地域は、世界の中でも赤道に近い雪の多い場所、世界で比較すると、地中海や砂漠地帯など暖かいところが多いです。では、どうして雪が降るかということ、日本海などが重要になります。地球の様々なプレートの動きのなかで、日本海ができ、白山という高い山ができる。それにより雪がたくさん降るといったことが起こっています。地球のいろいろな活動のなかで、ここに雪が降り、今の水の旅・石の旅につながっているというわけです。

もう一つ、水の旅・石の旅と言っている土砂運搬の石や砂の元は、もっと古い時代、日本がまだ大陸とくっついていて恐竜が生きていた時代の地層です。地層からはその当時の生き物の化石が見つかります。桑島化石壁はそのような地層の一つで、明治

の初期から化石が出ていて、国の天然記念物になっています。昔の生き物が河川の土砂などによって埋まり化石ができますので、化石が見つかることは、古い時代の水の旅・石の旅の存在を知ることができます。このような地球で繰り返されてきているプロセスを、この地域では特に水の旅・石の旅という整理の中で見られるのです。

さらにこの水の旅・石の旅が、ジオパークでいうジオとエコと人がとても深くつながっています。それぞれをつなげながら見せる、例えば人の部分から動植物の部分だったり地質的なことだったりにつながっている部分を見せていきます。そういった見せ方をするための、そのキーワードとして白山手取川ジオパークは水の旅・石の旅という表現を使って、ジオパークに取り組みだしたというわけです。

取り組みの経緯は、2009年頃から白山市の中でジオパークの動きがはじまり、2010年にはJGNにオブザーバー参加、2010年の11月には運営団体として協議会ができました。JGNの準会員参加後の2011年に申請書を提出、2011年9月に日本ジオパークの認定を受けました。かなり急いでジオパークになっていますが、その中でもしっかりと考えたのが、この地域にある資源を整理して、地域向けに発信するということです。それが水の旅・石の旅になります。さらに、地域の多様な関係者が関わって進められる体制を考えました。協議会は国の機関、県の組織、大学関係、地域の団体など、いろいろな組織、人たちに関わってもらっています。動きとしてはまだまだですが、ひとまず一つの方向性でまとめているような感じになります。

白山市がジオパークを推進している理由は、白山市は1市2町5村の合併市で、自然、歴史、文化、産業も異なるそれぞれの自治体が白山市になっていることがあります。合併して必要になるのが一体感、連帯感の醸成、そのための一つの新しい魅力であり、持続可能という部分では人づくりが重要になってき

ます。ジオパークに取り組むことによって、これらを実現していくことを考えました。ジオパークプログラムの、地域のいろいろな資源を結び付けるという基本的な考え方に魅力を感じました。もう一つは、地質系の資源がきちんとあり、長年調査を進めてきたという場所で、それと市全体をつなぐようなプログラムがジオパークではないかということがありました。

取り組んできた結果は、まだ何かしっかりと成果を示せるような状態ではないですが、例えば、白山市観光連盟が作るパンフレットでは、白山から手取川、日本海までというつながり、セットで考えるような紹介文があり、そういったつながりや水への意識というものが作られてきたように感じます。この地域を発信していこうといった時に、水というテーマでまとまるようになっており、いろんな発信物が一貫性を持つような状態になってきたというように感じています。発行物を見ている、合併直後の地域内の観光資源の出し方は、「個々のいろんなものがあるよ」だけだったのが、白山、雪、水、そういったストーリーを持って語られるようになり、ジオパークがそれを発信し続けたことが影響しているのではと思われます。もともとこの地域は水への意識が強い地域であり、おそらくそれが地域の人にとってみてしっくりきたのではないかとも思います。教育活動等もしっかり取り組んできており、持続可能な社会を目指すためには、やはり継続的な活動が必要かなと思います。

最後に、ジオパークの取り組みによる成果はまだまだかと思っています。しかし、継続した取り組みにより、当初考えていなかったような効果があるように思います。白山市は国のSDGs未来都市に選定されていますが、SDGsに取り組みだしたきっかけはジオパークです。さらに、ジオパークやSDGsに取り組む中で、金沢工業大学との連携が進み地域にキャンパスもできて、白山市のSDGsの取り組

みと一緒に進めています。ジオパークでは様々な大学と連携しているなどを行っています。金沢大学国際機構とのつながりでは、SDGs、ジオパーク、ユネスコエコパークというものを研究とか、フィールドの拠点として利用しています。東京大学とのつながりも出ており、地域未来社会連携研究機構の北陸サテライトが設置されました。ジオパークに取り組んできたことが、このような様々なつな

がりを作ってきていると思います。

以上のように、ジオパークの取り組みによって、地域一帯をつなぐようなストーリーが浸透してきており、一体感の醸成とか情報発信のまとめ感みたいなものにつながっているのではないかなと思います。また、取り組みが様々なつながりを作っていますが、それらは今後の地域活動の、発展の下地にはなっていくのではと思います。



佐無田センター長の挨拶でお伝えした通り、地域政策研究センターはその歴史にひとまずの幕を降ろすこととなりました。

前身である地域・経済資料室、地域経済情報センターの時代を含め、これまで当センターの活動にご協力頂いた皆様、本ニュースレターCURESをご愛読頂いていた皆様に、重ねてお礼申し上げます。

長きに渡りありがとうございました。

地域政策研究ニュースレター第117号

2021年3月31日発行

発行／金沢大学人間社会研究域附属地域政策研究センター 金沢市角間町（☎920-1192）☎（076）264-5438

編集／地域政策研究ニュースレター編集委員（菊地直樹）

印刷所／金沢市中村町28-14（株）谷印刷 ☎076-242-7267